

(彼女、口が軽いわね!) 並んで歩いていたら突然、秋子は言う。(えっ!) 私はどう返事をしていいか迷った。鞆の取っ手を持つ手へ強く力が入る。しばらく二人の間に沈黙が続く。(基子はどう思う?) 五、六歩、歩いてからおもむろな口調で秋子が語りかけた。(うーん) と口を開くことが返答出来ない私。恐らく秋子と春子の間で何かあったに違いない。おいそれと相槌を打つのも憚れる。彼女だって私のおべんちやらや阿りおしねを求めていないことは分かっている。ただ私に話したいだけかもしれないのだ。暮れなすむ五月の空、帰り道を私たち二人は突然、ヒミツを抱えたような気分で足を運んでいる。(わたしが秋で彼女が春だからって合わないわけでもないんだけどね) 私は思わずくすくと笑ってしまう。(でも、口が軽いわよ、だって先生へ、わたしが太郎へお熱を上げていることも告げ口しちゃうんだもん、先生がわたしを冷やかすんだわ、彼女以外誰もそんなの知らないのよ、いつか、こっそり打ち明けたことがあったの、それを先生へ告げ口されたわ) 名指しされた春子は私たち西南中学校合唱部の副部長である。そうして秋子や私はヒラ部員だ。合唱部は新入生の一年生九人が加わって二年生三年生までの総勢の二十五人の大所帯になった。秋の県大会に向けて練習の成果に励んでいる。顧問の浜田先生が先頭に立って熱心にタクトを振る。去年、この中学へ赴任したばかりの若い先生で私たちの兄さんのような存在である。大会で歌う曲は(埴生の宿はにゆう)、少し難しい曲であるが先生は映画(ビルマの竖琴)の主題曲になっていて大変素晴らしいイギリスの民謡だからテーマ曲に選んだと言われた。出場校は十八校にのぼるらしい。ほかの学校でも(埴生の宿)が歌われないとも限らないから油断は出来ないと先生は言われている。一日おき放課後の二時間が練習時間に充てられた。音楽室でオルガン伴奏に合わせて声を揃える。先生の指導は優しい。ガリ版で印刷した譜面を見ながら、ひとつひとつ丁寧に教えて下さる。(わーがー、やーどー、ここでいったん切って、ブレスだよ、息を吸って、ハイ!) (ハイ、ハイ、おおー、大きく強く! 流して、少し小さく、そのまま・・・) というふうに。実に熱心な指導で私達生徒の受けも良い。去年の大会は残念なことに予選にも残らなかった。新しく顧問になった浜田先生は(ボクの指導が悪いのだろう) と言って生徒に責任を転嫁しなかった。そういう先生の姿を見て、部長の太郎君、副部長の春子、それに秋子や私たち二年生七名は来年こそ頑張ろうと誓ったものだ。卒業の三年生も高校受験を控えながらぎりぎりまで協力してくれた。大会は十月に行なわれる。優秀校三校が選ばれてその内の二校が関東大会への出場資格を得る。関東大会は全都七県(東京、千葉、茨城、栃木、埼玉、群馬、神奈川、山梨)十六チームの激戦区である。さらに十二月に全国大会が日比谷公会堂で開催される。全国十二ブロックに選出されたそれぞれ中学校三校が覇を争う日まで続く。浜田先生の指導は生ぬるいくらい優し

い。そうして褒める、褒める。時には三年生の先輩が、（先生、もつと厳しくやって下さい）と不満をぶちまけたりすることがあったが、（すまん、ボクはダメなんだ、怒鳴り散らしたり叱り付けたり出来ないんだよ）とかわしてしまふ。であるから一部の男子生徒達の間には非難が沸き起こるのは避けられなかった。わたし達が三年生に進級してようやく部として纏まった感じがする。それは部長の太郎君が生徒会の役員で皆の信望が厚いことによるのかもしれない。勉強も出来るし温厚な性格によるものだ。浜田先生と歩調を合わせている。今年のメンバーの内訳は私達三年生がそのまま残って八名、（女子五名男子三名）二年生も八名、（女子四名男子四名）一年生は九名（男子三名女子六名）の構成であった。（埴生の宿）の楽譜を全員に配った先生は、（言葉遣いは難しいけれど、イギリスの自然に囲まれた山村のどこにもある風景が映し出されている世界的な名曲だよ、埴生とは、草生くさむした粗末な家、つまり小さく貧しい家の意味、質素ながらも、花や小鳥たち、自然を相手に生活する楽しさを歌った歌かな）と教えてくれた。イギリスといえばロンドンばかりのビルの都会を写真でしか知らなかった私達は、イギリスにも農家や山村があるということに内心驚きを覚えたものだ。海外旅行などはまだまだの時代で、岡春夫（憧れのハワイ航路）の歌が盛んに歌われていた。

埴生の宿も	わが宿	玉の装い	羨まし	長閑なりや	春の空
花はあるじ	鳥は友	おお	わが宿よ	楽しとも	たのもしや
書読む窓も	わが窓	瑠璃の床も	羨まし	清らなりや	秋の夜半
月はあるじ	虫は友	おお	わが窓や	楽しとも	たのもしや

先生は蓄音機を持ち込んで私達へ聴かせて下さった。有名な女性歌手が吹き込んだレコードらしい。美しい女性の歌声が鍵盤の向こうから流れてくる。うっとりするよ
うな歌い方である。四月からわずか一ヶ月程の練習がみるみる上達した。他の先生か
ら褒められていると浜田先生が言う。（今年は予選ぐらいいは通るだろう）と希望の
言葉を口にした。五月の連休明けに突然、部の中で秋子の春子への陰口が始まった。
理由はよく分からない。どうやら私だけではないらしい。余程、太郎君のことを先生
へ告げ口されたことが悔しいのだろうか。私も秘かに太郎君へは尊敬と憧れを抱いて
いたから、仲の良い秋子はこの時点でライバルになるわけだ。だから彼女の言うこと
にもいちいち反応せず黙っていた方が無難と考えた。それより、最近、春子が浜田先
生と親密らしいという噂が何処からともなく部内に広がっていた。でも、特定の生徒
の先生であってはならないことはそれぞれの部員は弁えているはずだった。依怙えこひ鬚ひげ
のない指導が先生の人気である所以、まさか、秋子が悔しき紛れに在りもしないこと
を言い触らしたとは思えないが。しかし、次々と囁かれる噂は更に重大な問題を孕ん

でしまう。浜田先生と春子が朝鮮人だという匿名の手紙が或る三年生の家へ届いたという。これは後日、秋子が私へ教えてくれたことだった。(春子は自分のことを棚に上げて、先生と仲が良いなんて許せないね、それに二人が朝鮮人だとは知らなかったわ、別に朝鮮人だからって悪いことはなにもないけれどね)怒った顔つきで言う。(わたし、もう、春子とは話さないよ、合唱の練習なんか行かない!)とまで言い切っている。日が経つ内に噂はヒソヒソと女子の生徒たちの間に拡大していった。さらには春子が先生の子を妊娠しているんじゃないか、ということにまで及ぶ。尾鱗が付いた噂は、このことが事実のように囁かれてしまっている。けれど一日おきの二時間練習は滞りなく行なわれた。先生の表情にも別段、可笑しなところは無かったし春子も何等変わりなく私たちと話している。ところが夏休みに入って間もなく、浜田先生が合唱部の指導に突然来なくなった。教頭先生が(夏休みは君達で自主練習をして下さい、浜田先生は事情があつて、しばらく学校を休みますから)と告げたのだ。私たちは呆気に執られる。あんなに熱心で元気だった先生が居なくなることが信じられなかった。部員全員がえっ!と声を上げた。何だろう?何があつたのだろうかと囁き合う、しかし、誰もが囁きあつた噂の後ろめたさに気後れして声を上げるものはいなかった。取り敢えず、部長の太郎君が皆の動揺を抑えて先頭で練習を再開することになった。と言っても夏休みであるから全員が揃うとは限らない、先生のいない練習は何人も欠席者が出て来た。その内、三年生の中からは春子も秋子の姿も見えなくなった。結局、夏休み中は半分の生徒数で声を揃える練習をするより他なかった。(なんだか先生が居なくなつてガタが来ちゃつたな、先生、早く戻ってきてくれないのかな)と寂しげに話す太郎君。うなづく私達部員。家へ帰ってから、一部始終をお母さんへ話し始める。と黙って聞いていたがお父さんは、(それってさんそじゃあないか)と口を挟む。(さんそ?)そんな言葉を知らない私は晩酌中のお父さんへ鸚鵡返しに聞き返す。(うん、そんな匂いがするな!讒訴って言って、むずかしい言葉遣いがある、意味は、人を陥れるために在りもしない陰口を言うことだ、辞書で調べてごらん、世の中には昔から、さんそ、さんげんが満ち溢れているんだよ、先生も誰か敵に回してしまったからかも知れんな、お父さんは浜田先生を知らんけど、在りもしない陰口であれば気の毒だよ)私はお父さんの顔をじつと見つめた、大人の世界ではそんな卑怯なことが日常茶飯事に行なわれているんだというお父さんが、急に遠い存在に思える、お母さんが(あなた、もうその話はよしましよ、これまでよ、・・・基子、お代わりはいいの?)と話題を遮った。その夜早々に私は自分の部屋で辞書を開いた。さんそ、さんげん、あるある、むずかしい字である。東洋漢字では見かけない。讒訴とは、相手を陥れるために目上の人に在りもしないことを作り上げて告げ口をすること、と解釈されていた。浜田先生と春子が韓国人であるとか春子が先生の子を身籠つて妊娠しているとか、それはお父さんが話してくれたようなさんそ、さんげんだらうか、しかし、なぜか私の

胸は高鳴ってしまう。身近な人達が持つ隠し事を、図らずも覗いてしまったような奇妙な刺激、二学期が来ればすべてが判るに違いない、私は思春期にありがちな妊娠という性への妖しい時めきに心を奪われた。そうして心の底に潜んでいる別の意識、朝鮮人たちは劣等だという感情が沸き起こっていることをはつきりと自覚した。また、彼等は恐ろしい人々、という根拠のない風評も基子の奥底を蝕んでいた。

夏休みが終わって二学期が始まる頃、浜田先生が病気で東京へ行ったという話が教頭先生からあった。しかし、皆は半信半疑であった。私達に挨拶もなく合唱部を放り投げて先生が病気で無責任に居なくなることは信じられなかったからだ。浜田先生は補助教員という役割で担任クラスは無い。音楽の授業だけが受け持ちだった。詳しいことは判らなかったが先生の病気は何なのか、そうして韓国人なのか？春子も韓国人であるという噂、彼女の家は肉屋さんとして商売をしているのを聞いたことがある。韓国人という告げ口をされた浜田先生と春子はどう受け止めているのだろうか？疑心暗鬼になりながら私達は極力、その話題を避けて先生と春子のいなくなつた合唱に取り組んでいた。だが、タガが外れた桶のような具合で中々成果は上がらなかった。太郎君も（悔しいね！）というのが口癖になった。結局、十月の予選は通過が出来なかった。大会が終わって三年生は二月の高校受験に向けて精を出すようになった。合唱部には就職組みも四人いる、お互いが次の青春へ飛び立とうとしていた時期であった。先生も春子も、そのまま学校を欠席し続けた。卒業後判ったことであるが春子は既に十二月、北朝鮮帰国事業で一家挙げて帰国したらしい。やはり春子は韓国人という、あの噂は本当だったのだ。浜田先生は？それに妊娠もそうだろうか、美少女の面影を宿す春子も若さに溢れていた先生も悩んだだろうな、苦しんだだろうな、私は訳もなく想像を廻らしていた。

* * *

指を折って数えてみると五十五年前の記述と記憶はそこで終わっている。中学に入学してから付けはじめた日記は基子が二十五歳で結婚するまでずっと続けていた。十三冊の日記全部を先日、実家の寡^かつて基子の部屋から引き出した。父が八年前他界し昨年九十二歳で身罷つた母のあと、誰も住む人の居ない築六十年以上という土地家屋を手放すことに決めた。一人っ子だった彼女は父母に溺愛されて今日まで来たことを改めて痛感する。孫の顔を見せられなかったことが一番の心残りだった。コウノトリも飛んで来なかった。基子夫婦のどちらに原因があったというものでもない、天の配剤によるものだろうと諦めた。父亡き後一緒に東京で暮らそうと呼び掛ける基子夫婦に母は気丈にも（アタシは一人のほうが気が楽で良いよ！）と言う。夫の転勤に継ぐ転勤で満足に両親の面倒も見られなかった彼女だったが母は何時遊びに帰ってきて

も好いように部屋をそのままにしておいてくれた。そんな母の優しさを痛感しながら整理中に見つけた古い遠い記憶、三つのみかん箱へきちんと納まっている基子自身の掛け替えの無い過去に向き合う作業は、興味しんしんの気分を齎もたらした。青いインクの字が滲む、そのペンの感覚さえ甦もよほって来る、そうして中学一年生の日記開始から恐る恐るページを括ったのである。併用して恩師やクラス仲間の卒業記念アルバムも取り出してみる。四十八人の三年七組、担任の原島先生、だが、部活には浜田先生も春子の姿も写っていない。教頭先生のつるつる頭が前列に見えるだけだ。連絡も途絶えている中学校の同窓会、同級会は開催の話も聞いたことはないけれど皆が古希に手が届く年齢を迎えてしまった。東京に出たという浜田先生も元気でいらっしやれば八十歳前後だろうか、帰国した春子は達者だろうか、幼い頃に何処からとなく刷り込まれた韓国人への差別感覚、自分が寡ひそまって韓国人を劣等視していた感情が薄っすら甦もよほってきた。今では韓流映画へ嵌はままっている自分の存在が可笑しいくらいである。その矛盾した感情にどう辻褄を合わせるのか。(口が軽いわね)と不満を述べた仲良しの秋子は今はどうしているだろう、別々の高校進学ですっかり疎遠になってしまったが。太郎君も偉くなったのかな?ふっとそんな思いが連綿として頭を過ぎる。すると、さんそ、さんげん、の難しい言葉を教えてくれた父が目の奥に現れた。偉くもならずして母が転勤の愚痴や不平を漏らしていた会社勤めの父は、でも、基子の誇りでもあった。父の死後、母は、私達西南中合唱部の浜田先生からの課題曲でもあった(埴生の宿)の地の通り、古里の陋屋ろうおくで慎ましい生活を送っていたのではないだろうか、そんな気がしてならない。晩年、母は幸せだったに相違ちがいない!強い確信がやって来る、それは基子にとって限りなく嬉しいことだった。

基子はイギリス民謡(埴生の宿)を改めて口ずさんでみたくなった。日記帳に書き込んだ歌詞をなぞりながら初夏の未だ明るい夕方の小さな庭に降り立った。もうここへ二度と立つことも無いと思いつながら。

はにゆうのやども わがやども・・・
きよらなりや あきのよわ つきはあるじ むしはとも・・・
たのしとも たのもしや

ハイ、ここで大きく、強く押し出すように口を開けて!